



源氏辨了抄

九



九
曜
六
庫



東屋

宇治第六

いさつ綱為卷名蓮廿八歳八月より九月まで乃
ゆとのせり

けく山とまげみまりき

常陸國の名

考^{通云}和歌をよみては流の字と濁てよむ也文章
いして清てよむと習^{きい}守又草の法世法^まから
ぬやうによむ故也

海^{つば}波山とまげ山とまげをいひらひさるるなり

うみのよども

仍^た覚^え云^く常陸守の親王は但^たす家

官^つまてく人いさつす國の吏^し務^むとい^い命^{めい}つ^つ沙^さ汰^たする

故よ今と受領と寸このゆへに今と守とらふ也

すぎく五六人

常陸守の前の子三人あり

花人益武部丞と源サ納言りまると積波守りま

これと常陸の花人右近将監と男よりいとかお

の妻とい三人の浮舟の母守の腹也

夢かどもれくおゆぐおぬくおおひすまう一透

くらやうよ

東にそゆおられる人のよいおにえとておひひれ

かゝるんと

花 庚申注曰人脈中有三戸為

人大害常庚申之夜上告天帝記人品過絶人生

籍庚申夜不寢則不得天上

許渾詩云

年長毎勞推甲子

夜寒初共守庚申

あゝあゝうらう

花 肉教坊の太宿針のころころよ

ありあり樂人舞姫ありありあゝと琵琶ひよ

名属教坊第一部とありも肉教坊のゆりや和漢

や子樂人のありあゝといふ

ついで

追従 冬顔ニ入

わづらひぢこころあつまいすまはものあつと

仍覚云邊と常陸守の宮子よとるれらういふ

ゆりれ舞也といはれて常陸守ま見素すのゆ

さうぞしてそあつりよけりげに経廻す計え
ハ当る紀と也

け此の如く 仍覺云ふよあつれ此徳と云詞ハけ

比の義あるゆへに詞子あきつら

大はまろんぞくらくとそん 古記云権大納

言去年獻續勞宇官マ 囑託と申して官マ

の是 弄 くらう法てあり

みどのいづきむとあそえはへる 今この女二宮

國史云正三位源朝臣潔姫者嵯峨五十一天皇之

女也母當麻氏天皇五十二選聲未得其人太政大臣正

一位藤原朝臣忠化公弱冠之時天皇悦其風操

超倫殊勅嫁之潔姫性能五十三異頗可賞五十四既

潔姫者淡殿后明子五十五之母也明子之胞

之長子者五十六代清和天皇也

ゆらりなり東消 東消見善相公意見

ふ川が若原あつまごねと并乃みそよとめ又祭使

あゆめきたる箱こよあつまごね一箱と成らう此

あや箱

けはるは海よあつま人のもれとあなつちあり

とさへい 實枝云浮舟の方に執執るきとさへい扱

人のあまづまをさよふゆい中君へ強よほりりむつさ
セタぶらりえんせ

河東 野宮さんをつきセタの年につまひあかあす

るどしきえちかふにうり 武官帯此の也

北山抄云外衛佐等任意不帶之至于迎衛次將

帶鈕止敵無妨仍宿侍之時副於宿物持之自餘

不能持上

蜻蛉日記馬臥いなりし所ちて紙一太刀のき例

のゆりれどあ色の扇すく一紙ちめてし

かけらめのもくいとえいらおなり

うららの物流めれらるのしけらる地せめ

つめゆいよそむい

策のつめゆい武野のまみなるうきをさふ

人よあまづまはありはむいづはるりあか人のさ

かにこそ 實枝云是みる子の習と

画の字孤いしうまあるものやあやういん

中流の我もとらふ

浮橋のあえれりりり 初陸奥守めて

下一時のり款

花吉今 垣竈のまへは浮橋の浮てあひのある世なり

常陸國常陸子信太信太浮嶋と云ふあり是と浮嶋といふ
まや又姫の浮嶋の奥州奥州とされといふや
らうか一乃とのこらひありとらう人ゆら

世津世津心心ひりやうらうらん我身我身つ乃つ乃のあまの
つくつく山乃ありと海也 け初初てこれ初初の浮嶋の

陰奥守陰奥守まへ下一物物よりまへて常陸守常陸守まへて
義と経義と経うらと

山前山前のけさひあまこし 前馳前馳のり
岩岩木木より移移わかもり

河 人人非非木木石石皆皆有情有情 白氏文集

山前山前のけさひあまこし

あまのけさひあまこし 高木高木春春よ童乃

山前山前のけさひあまこしと中君中君の佛佛とらん
とのけさひ

くまあまのけさひあまこし 伊勢伊勢の
大あまのけさひあまこしとえと

つあまのけさひあまこし 花古今
大あまのけさひあまこしとえと

あまのけさひあまこし

仍覺云蓮の身を親とてうりたまひ世中よかほ
よといひて恋ほし海といふもいひよふもいひ
かんのきざりしるもい

かかたの光ととも約つけさせめ

蓮は蓮の光ととも度星よとてうりたま
ま蓮は蓮の光ととも度星の光といふとこの相とせ
たうりたまもかやうよんもいひよふもいひ
つるべきと申すの君母の中君乃ゆとゆり男
とい度星といひ女といふととていふ也
ふりぬくつらぬき程も三と称もいふゆい

いれもよぎまといふりも桔槔もいひよふもいひ

時へんまも 仍見え下の時乃字すといふいへ

いれのはぬいしうらや又もいひよふもいひ
よらうい

法花經曰若有人聞是藥王菩薩本事品能隨喜
讚善者是人現世口中常出青蓮花香身毛吼中
常出牛頭栴檀之香

權記 行成師 長徳 六十六 五年十月九日於山
寺 祿見牛頭栴檀等 山ノ峯牛ノ頭ニ似タルト也

かの五れらうくちりまひはくへ 行跡

仏の海し〜はひきり 經曰實諸者不誑諸者

ものきき穿しごんすまわまで

河古今 花鳥れ新も穿しぬ奥出のうれん〜く〜ん

いふかの中にもられた

花鳥 うちま〜ん 巖の中よすまご〜ん世のいれれぬ〜ん

るれ〜ん〜ん〜ん

弄 ちん〜ん〜ん 事ゆはつ物とるれぬ〜ん

いゆ〜ん 沐の字や〜ん〜ん

い〜ん〜ん〜ん 白鳥部〜ん 好きと〜ん

河越次の河よらつ〜ん 女ゆ〜ん〜ん

あ〜ん〜ん

す〜ん〜ん〜ん 主人の礼法た〜ん

れ〜ん 白文の不義〜ん 好き乃〜ん

ま〜ん 世の〜ん 花鳥

い〜ん 後の鞍〜ん 馬

さ〜ん け 河白文〜ん

い〜ん 花鳥〜ん 物と〜ん 曲

い〜ん 実〜ん

之川が 藤原君 長門刀自部女に比魅女 元亨叔書 祈スル物アリ

の侍遠るるより今敷のりらひは如何か

つらき さこあうと云 物語子東部女とて人の祈

るる子あり今葉いづはあも巫なるべし

にありまや又云伊賀伊勢の讀子媒と部女といふ

平野社乃妻社子部女の社といふ瓶也

の人とにづりて子とて媒とて人とも

はるまや 今俗呼老女為専 漢語

又いよとふべきと人の抱ひいふてあら抱る

仍覺云葦之の姓音持るるを思也

は春の發端子流

波山といふまがきいなるありながる端山の

まであなづらひひいんもいと人きりあらく

しつと詞と因は

あつかりよつともあつるに

河新初 依野直 大和

くろくもほくらぬる三輪が海依野の

ことひらするのこ 仍覺云山里のれ

簀子也

何としら海やあきあきのあまの

東屋のまや乃あまのぬが

催馬樂 津 東屋

催馬樂 津 東屋

催馬樂 津 東屋

一 阿の兩下あまのあまりのぬぐはれぬはれぬは

二 押開おしひらきもせ我われや人妻ひとつま

兩下ふたもとと離念りねん也あまりと軒のき也ぬぐはれぬはれぬは

仍なほ覓み云い又また字じハ戸ととて久くく著しやく志しとまうせむる

い福ふくり人もあらずと也なりこひは我われ立たぬぬぬぬ

うせとあて戸とと開ひらて導みちへへとと

ひびのららと 畜ちく道どうの熱ねつ名な

斐ひ方は人にのうら雲うら繩じゆも斐ひ方は工くもあまり大だい土と小せう

二 ちのど百ひやく官くわんの因いん畜ちく子しあまりたか畜ちく道どうといり

よとぎのまろ移うつり 上かみ子こ三さん条じょうの妙めう家かよて浮う

亦またの母はは乃なり詞ことば子こ旅りの宿しゆくりいつ途みちくよて座ざのあも

いぶせきくらすりよや一いちれあづま替かへへる者もの

せぶらり出入でいるぐさあまんらへき前まへ載のりの花はなもり

ま 夜よの蓬よもぎ生なまの宿しゆく乃なり也なり世よらりあま一いち宿しゆくと

蓮れんの丸まる寝ねといくらちり

りうきうりうきうとれり 法ほふ性じやう寺じハ貞まこと信しん云い 忠ちゆう平へい 建けん

立たつ一いち法ほふり尊そん意い座ざ主しゆハ貞まこと信しん云いの師し檀だんりり級けい子し

法ほふ性じやう房ぼうの丸まるとて法ほふ性じやう寺じといり

うすめのかそあがと車くるまの中なかに川がはへりとい

漢ノ武帝ノ妾班女ガ扇ハ白故ニ雪ニ喩タリ秋ハ

白色ナル故ニ秋ノ字ヲ出ス楚ノ莊王ノ蘭臺ニテ

陽春白雪ノ曲ヲ彈ゼリ文選ノ注ニ琴ニ有迴雪

曲トアリ班婕妤詩ニ曰ク

新製齊纨素

鮮潔如霜雪

裁為合歡扇

團々似明月

此詩は浮舟の白き扇とまさぐりうらりうらり吟ぶ

一 新製

扇の色ゆふと紅つなき袖やのうらりうらり吟ぶ

班女は後子推られらぬ事と似てはうらりうらり吟ぶ

むらと

あはれあれあやうらりうらり吟ぶとかがき

仍覚云けい句とほかして後悔し後ふ也浮舟の

前表は後ぐあききありと一也

うらりうらりも哀も也

辨るるうらり大君と云ふ

は葉のうらり浮舟はうらりうらりを恥とぬ又は云

うらり哀もかりす也

け弁を引く所也

のり引肉宴等

賭うい正月十八日天宮

場敷きて見覧也 近備司宿願也 肉宴い正月廿一

日文人博士ども詩と作ては前よて悔せり

つとめ 仍覺云まも司にありて一系宿除目

とりつ三月ありて事振添抄よ三月二日よりえ

よつづききりるれど今秋の途目とぞりよるに

も厚よ也系よある法司とほせりゆへ系宿

い中や秋の司に八月十日定考の事也

わづらうとさるらまよよむが信のましく也安

のふ親まの人の司とすすめ給へ自身の昇進

け肉記へのぞびりありてよふひらうでいんよん

とよ 肉記が自身の昇進の執奏と途目乃比

るれい句宮よ頼もらん為よ石義とんま君よは

ふい倭臣の最上も君臣の戒よ事なり

をてあつま一況りよワがぬらもをわがせと

人ごに悪と好む人我らも悪とい知る人

とちまきこと免ぶのめとてあやうき事とする

のこせが人の中ら我神のこけりよを私欲の爲

よろまされて石我としてたのこせせんを
あひて身のわりがらふとあけりなほ浅き一足
よあつむや

又あまれ志づいて約守しを治らんを

仍え云今系よは路よの宛べりうど董の系へじ入路ひ

て後こそ親もも由んし石山へもまうで治めと

うごころや 過 平聲の対うごころとよむ来

とよふ也 仄聲の対うごころとよむ也 師説

何ゆもいかり限りせあこあれ

何 可 志引ん故い何せんいさう世のあこもくいんまへり

初津の記者今日よりうてらう一途へと大いぞ

とそらち 傾云 右道率尔よえとあけてまがあやまり

と恐れてのり也されを悪めとして祓佛と祈よ

感應いさく却ち罪よあよる也 盗とてあつねぬ

やうも祈よあや一万事とちよに志ひて初とつ

一めとの教也

足進せくわつぶそのゆぞと

古今 ままあたあひく山の橋た足れせあつね君にぞまける

神の中もぞうめぬらん

何古今 あつたりし神の中よやならん我が魂のるれらん

人々ぞいでいぬぬ天下の大法よきむろゆん
こころもあはれびさ

むき洲崎よそらかきこのすま

詞詠下よ題い備

蒼茫 霧雨之霽初寒汀鷺立 雨居賦張續

花 かつぎい先い静のうすを云然れ愛あい海を

云静橋を法よりくみい鳥もいれ又白鶴とも

りて家流きり

鶴のよすやうづこ夕暮のやわよ白蛇若れ枝

い奇い鶴乃父と白蛇物よとくられうい詮通

しそ用べきにこそ忘事と萱草のしひ又忍事

のまふせりかごと

山川子川静とて奥くひて鳩の大きなるありて流

も山あひより流物あるれい川がすのゆりうら

梅づんすいひ流す 催馬樂 呂 梅枝

梅づんす来わら雪まきけてまれ

春うけてるけいもいまい雪いあつ

あふれうこころやまいあつ 足下也

すいろりちりあつらうらうらんつこあかりう

い河白文と罪科よかこもいころ詞也たとい現

世^せまで^え別^べとの^のづれ^れ終^はふとも^も當^{たう}集^{じふ}めて^てその^のむ^むら^らひ
は^は御^ご率^{そつ}の^の訶^か責^せま^ま帝^{てい}皇^{かう}とも^もゆる^{ゆる}ぬ^ぬも^も是^こ人の^の
事^{こと}と^とぬ^ぬむ^むじ^じる^る下^げ賤^{せん}す^すせ^せぬ^ぬも^もと^として^{して}人^{ひと}乃^{なり}
鑑^{かん}と^とら^らう^う本^{ほん}人^{にん}と^とら^らふ^ふへ^へら^らん^ん也^や

や^やい^いあ^あや^やる^る一^いや^やし^しが^がゆ^ゆら^らひ^ひ 董^{とう}の^の海^{かい}人^{にん}

衣^いろ^ろ一^いき^きあ^あら^らひ^ひも^もや^やと^と
其^{その}の^の衣^い片^ぺ園^{えん}あ^あや^やり^り梅^{ばい}花^かを^をみ^みぬ^ぬも^もや^やら^らひ^ひ

其^{その}の^の君^{きみ}も^も回^わト^とり^りて^て今^{いま}二^に三^{さん}ま^まら^らけ^けら^らめ^めい^い也^や
す^すこ^こ一^いし^しお^おび^びま^まら^られ^れら^らう^うに^に 白^{はく}文^{ぶん}い^いふ^ふ葉^え下^かに^に

誕^{たん}生^{せい}あり^り董^{とう}い^い次^じの^の年^{ねん}柳^{りゅう}本^{ほん}卷^{まき}に^に誕^{たん}生^{せい}あり^りて^て一^い川^{せん}
所^{ところ}ら^らと^とけ^けふ^ふよ^よ二^にと^と兄^{あに}と^と弟^{てい}と^と古^こ来^{らい}る^る書^{しよ}せ^せり^り
是^こい^い年^{ねん}の^の初^{はつ}め^めは^は自^{みづか}乃^のら^らう^うく^く足^あゆ^ゆら^らと^と又^{また}年^{ねん}
より^{より}も^も容^{よう}赦^{じや}の^のひ^ひ録^{ろく}ら^ら人^{にん}今^{いま}の^の世^よも^もあ^あら^らる^る也^や
董^{とう}大^{だい}拍^{ぱく}い^い自^{みづか}文^{ぶん}より^{より}年^{ねん}へ^へより^{より}て^てみ^みゆ^ゆら^られ^れよ^よ二^に三^{さん}の^の
兄^{あに}ら^らう^う歎^{なげ}と^とい^いひ^ひら^らう^う

友^{とも}ま^まつ^つら^らう^う消^{しょう}跡^{せき}を^をら^らう^う也^や

妻^{つま}の^の名^なと^と待^{まち}辨^{べん}と^と約^{やく}も^も作^{さく}せ^せり^り
是^こら^らの^の内^{うち}紀^ぎい^い式^{しき}部^ぶ少^{せう}輔^ふを^をん^んけ^けら^らう^う

大^{だい}納^{なつ}記^ぎい^い詔^{みこと}書^{しよ}宣^{せん}命^{めい}位^い記^ぎを^をと^とす^すつ^つら^らう^う也^や式^{しき}部^ぶ

少輔ハ獻策省試をとりつゝと職也（ついで）のり

ひししき職也

多明の月すこのりて 實枝云作文ハ二月十

日の程也今多明の時ぐされ（策文の次）日法

へ東路よまあしむい宿の（後）若志の夜（し）き

と兼りやと吟（い）一討の若（し）りえ

次の日乃やうよ申る（と）也

だらむまのふ（つ） 橋より一町（り）で川下（あり）

川中流也川水大藏へ（ま）ぐれ（と）え和の比せ

きとめ伏見の（り）へ（け）ら（せ）り氷（と）

流りて橋（つ）も流（て）今（い）け大（と）山（と）

國のふも也（万）紫九卷（子）

大（と）の入（い）ひ（い）ぐ（と）あ（り）人の伏見の田（面）宿（と）り

世（は）とど（ろ）と（と）も（と）也又大（と）念山（と）の（い）道（は）

四

ら（が）み（り）す（れ）は（い）と（い）あ

大（と）の（い）麻（乃）なる（り）石（川）の（い）り（と）入（り）る（と）

の（手）さ（あ）ひ（い）一（し）の（い）ひ（い）を（ま）す（ま）わ

との（策）文（の）ま（り）乃（は）敷（内）裏（は）て（は）白（文）の（と）の（并）な

る（て）董（の）衣（る）と（は）夜（の）や（と）打（と）り（と）ひ（と）

よりり 仍云云董のを魚珠勝也中云へんあれ
 ろがなるも中君のなるも外中宮儀はべりしとて
 悪ししとて也 論語曰肉有不疾とて
 罵意経曰人巫作善惡有四神知之者地神二
 者天神三者旁人四者自意
 法こゆるはしとて云々

君とて云て何れとて云りて末の松山波もあれん
 うど終り 肉会人帯釘具兵杖武勇者也兼坂
 東掾也 禪云さづひのふや帯釘と
 系宿や

つくりてありたけしはげとてその中なる

史記曰忠臣不仕一君貞女不更二夫

あげのふとてよりまことの終り

君はあんなその日とつと松のまは昔乃乱て地とて

けとて松蘿の整りとして史婦のたて也能て其家

いそとひのみとれらる哉也

昔いげさうざら人のありし海のつれとる紀よとひ

まづいしてさうとてあつとてあつとてありとれ

大和物語云撰津國の女と同一國の男姓は竟原と

和泉國の男姓は智奴と二人一女と云り男は

こ乃万葉の故事といひて古和物語の作らるゝと
也三人の塚は同一里なりとあり塚の大ききあり
世町なりとあり此あり居崎の領ありしに
元年比用ありて塚の土と堀をんとせし
磨りの矢の根多しと云ふ奉納の者意に
き破へりといひて元のはしりてなたりとあり

万葉十六云昔者有娘子曰櫻兒也于時有二壯
士共譚此娘而捐生捨競貧死相敵於是娘子敵
歎曰後古来干今未聞未見一女之身往適二門
矣方今壯士之意有難和平不如妾死相害永息

爾乃尋入林中懸樹經死其兩壯士不敢哀慟而
泣連襟各陳心緒作哥二首

まがれいづかにせんはれさひ 櫻乃花の散はけりも
いもがれよりけり 櫻乃花の散はけりも

或曰昔有二男同聘一女也娘子嘆息曰一女之
身易滅如露三雄之志難平如石遂乃彷徨池上
耳無 沉没水底於時其壯士等不勝哀慟之至各
陳歌心作哥三首 娘子字曰瀧兒哥 男之二万葉十六

實技云河海へえ例の門。花のい同歌の門より
けこうう世のありは海もとらりしすくもそかぬ

屠取之羊歩る唐土は羊と牧して食する時よ
のちして屠取へ相具して行て殺す歩るよ
かひて死地よとつく是と無事市に爲る

今日も又午の具を吹つる羊はめいどづきぬ
何とぞなうに世中にさめむらつとてとる君も
空蟬のつとんつとむらつ浮子の山をゆたえ
今日とて志ふま物と羨いもつととる君も
け二首の細くあり

人の心とよみあんをひつれ
解夢書曰夢見病人死必死

みの枝よゆひつけて
木の枝よ付らと枝巻教とつひ箱よ入らと
巻教と号と

ふらふらのすつら
人よあらんつとけはれよひまて胸の可なり
ころちやせん



